



Title	「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」授業構成の試み
Author(s)	荒井, 真一
Citation	教授学の探究, 24, 27-51
Issue Date	2007-02-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/18883
Type	departmental bulletin paper
File Information	kyouju24-27.pdf



「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」授業構成の試み

荒 井 眞 一

(北海道大学大学院教育学研究科博士課程)

目 次

はじめに

1. 経済を基礎とした歴史教育の構成
2. 授業プラン「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」の骨格
 - 2.1 授業プランの目標
 - 2.2 授業プランの指導過程の考察
3. 授業の概要
 - 3.1 授業の構成
 - 3.2 授業プランの内容
4. 感想文を基礎とした実践の評価
 - 4.1 問題ごとの感想から考察される実践の評価
 - 4.2 総括的な感想の検討

おわりに

は じ め に

先稿⁽¹⁾で筆者は、授業プラン「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」作成の前提となる事柄について考察した。本稿では、先稿の考察結果をふまえ、上記プランの提示を行なう。

上記プランの提示に先立ち1章では、筆者の意図する歴史教育の根幹である経済の、本稿における定義づけを行なう。続いて2章では、授業実践の成否の検討にあたり不可欠な、プランの目標と問題配列の理論的な根拠づけを試みる。

本稿執筆に先立って筆者は、上記プランによる実験授業を2つの大学で行なっている。そこで本稿では、3章で上記プランの内容を提示した後、4章では実験授業の際に集められた(学生による)感想文を基礎に実践の評価を試みる。

上記プランは中学校社会科(歴史)の授業を意図して作成されたものである。しかし、上記プランは、中学・高校・大学の授業(講義)で教えられることのない内容を多く含んでいる。各学校段階に応じた語句使用といった留意点はあるものの、未知の事柄にたいする認識形成の道筋に大きな差異が生じる可能性は小さいだろう。それゆえ大学生によって書かれた感想文を基礎とした考察は、各学校段階の学生(生徒)に共通する認識形成の道筋を探るにあたり有効と考える。

1. 経済を基礎とした歴史教育の構成

歴史教育は、一人一人の人間によってつくられる社会のありようが主軸となるべきと考える。一人一人の人間によってつくられる社会のありようが、ひろく政治や文化といった事柄につなげられてこそ、歴史は教育となりうる。この考えを実践の場で実現するための方法として、経済を歴史教育の基礎にすえることを提案したい。

経済史研究者の林玲子は、多くの経済史研究が「庶民の日々の生活に対しては価値をあまり認めなかった」ことに疑問を呈し「生産―流通―消費の全ルートを追わねばならないと考えるようになった」という⁽²⁾。生産・流通・消費の全ルートを追わねばならないと考える理由として林は、「生産だけが価値を生み出すのではなく、ニーズにより商人の手にわたり、加工・仕上が行なわれ、多くの消費者の要望にこたえる商品が誕生する」ことをあげている。

生産された商品は、生産地から卸売商人・販売店を経て多くの消費者に提供される。そこで本稿では、生産・流通・消費という商品のたどる道筋を歴史教育の基礎にすえることを提案する⁽³⁾。この採用により、異なった場で活動する多くの人々の姿を、統一的に把握することが可能となる。それゆえ、本稿では「経済」という語を「商品にかかわる生産・流通・消費」と定義する。

19世紀初頭の日本では、大量生産のはじまりであるマニファクチュアが一部業種で行なわれていた⁽⁴⁾。分業による大規模な生産は網の目のごとき流通網とぼう大な消費をともなう。多くの人々によってつくられた生産・流通・消費のありようが、特定の業種において具体的に示されるなら、社会の仕組みが土台から動揺していく様子が（限定的であっても）具体的に示される。それゆえマニファクチュアのみられた19世紀初頭は、権力が特定の個人から大多数の人々へ移動する始期といえる。このマニファクチュアのみられた「江戸時代」の経済を歴史教育で採用する意義は、一人一人の人間によってつくられる社会のありようを主軸とする教育内容構成の起点となりうる点にある。

荒居英次によれば、野田造醤油仲間の茂木佐平治家（後のキッコーマン）では、1863年に12,955石（約16万人分の年間使用量）のしょうゆが生産されたという⁽⁵⁾。また、大量生産の達成にいたるしょうゆ醸造業の展開過程は、石井による時期区分に一致する⁽⁶⁾。それゆえ、しょうゆ醸造業の展開過程を軸とした生産・流通・消費のありようを教育内容とすることで、社会の歴史的な動きの基礎が明らかにされるだろう。

2. 授業プラン「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」の骨格

2.1 授業プランの目標

授業の目標は、資本主義的生産とは何かを、成立過程にそくして、実例をもって教えることである。資本主義社会とは位置づけられない19世紀前半において、多くの一般の人々の活動を基礎にして、しょうゆという商品の大量生産が達成されたことを知ってもらおう。上記目標の実現を考察するにあたり、先稿で考察した資本主義的生産の定義および要件を、以下に示す⁽⁷⁾。

図1：資本主義的生産の定義と要件

資本主義的生産の定義：資本の蓄積を基礎とする商品の大量生産

要件1：市場が形成され、社会内全体における分業が達成されること。

要件2：貨幣経済が発達していること。

要件3：個人の資本の増加が、年生産物の増加として明らかにされること。

要件4：大量生産が、多くの人びとによる消費として、確認できること。

上にあげた事柄には、すべてふれなければならない。定義について考えるとき、“大量生産が行われた”という結果のみを述べるわけにはいかない。それゆえ、17-19世紀における経済発展の概要が必要となる。この概要を必要とする点で本プランは歴史教育として位置づけられる。

先稿に示したように、上記経済発展の概要はしょうゆ醸造業において典型的に見い出される⁽⁸⁾。それゆえ、しょうゆ醸造業における大量生産の達成への過程が叙述の中心となる。この過程が述べられることで、しょうゆ醸造業で達成された大量生産の基底に個人の資本の増加が存在することが明らかになる。この明示により、要件2と3が満たされる。

要件1においてあげた社会内分業は、大量生産の達成への過程を述べる上で欠かすことができない。しかも、しょうゆ醸造業との関連の中で述べられる必要がある。しょうゆの大量生産が達成されていく過程で、小麦・大豆・塩などの原料や明樽の流通経路が確立された。これらしょうゆ醸造にかかわる物資と生産地とのつながりの具体的な記述により、要件1は満たされる。

要件4について考えたい。先稿に示したように、しょうゆ醸造業の展開過程がもっとも明確にあらわれた食品はそばである⁽⁹⁾。そば食の普及の中で、人々の消費にも、変化がみられた。お客さんを招いてのそば食や、そば店での交流などに、その変化がみてとれる。また、江戸市内では、一般家庭での日常的な食事の場面でも、しょうゆは使用された。食物史における研究成果から、一般家庭の家計に占めるしょうゆの割合が導き出される。上記そば食の普及、および家計におけるしょうゆの割合の記述により、要件4は満たされる。

上記方法の具体化により、資本主義的生産の定義および要件は授業プランにおいて述べられ、授業における目標は達成される。

2.2 授業プランの指導過程の考察

本節では、資本主義的生産の定義及び要件の理解を可能とする指導の方法を、先稿にまとめた、経済史・醤油醸造業史・食物史における研究成果との対応関係から考察する⁽¹⁰⁾。

2003年に(国内で)生産されたしょうゆの約50%は上位5社(キッコーマン、ヤマサ、ヒガシマル、ヒゲタ、マルキン)によって生産されたものである。そして、これら上位5社中3社は千葉県に位置しており、しょうゆの県別生産量に占める千葉県の割合は、34.1%にも達する(2005年農林水産省総合食料局資料より)。1・2位に位置づけられるキッコーマン・ヤマサの両社もまた、千葉県に源を発する(生産量4位のヒゲタも千葉県である)。上記2社では、19世紀初頭にマニユファクチュアという形で大量生産が達成されていた。本プランでは、しょうゆ醸造業を記述の基礎にすえ、前節で述べた資本主義的生産の定義・要件をふまえて理解

してもらおうための方法を、仮説として提示する。

本プランでは最初に、現在ある代表的しょうゆ醸造企業の名とその所在地を問う。ただしこれらを問うにあたり、生徒各々の家庭で用いられているしょうゆの、銘柄と産地を調べることを（授業開始以前に）課題として出しておく。この課題にたいする解答を通して、キッコーマン・ヤマサあるいはヒゲタといったしょうゆ醸造企業が、すべて同一の県に源を発するものであることを知らせる。この提示により、しょうゆという商品の大量生産の達成には、何らかの要因が存在したことが暗示される。

本プランでは17-19世紀の経済発展について、石井による時期区分（量的拡大期としての17世紀・内包期としての18世紀・再拡大期としての19世紀）に従っている¹¹⁾。しょうゆ醸造業の発展過程も石井による時期区分に相応する。商品としてのしょうゆが畿内地域から江戸へ流通されはじめたのが17世紀であり、江戸周辺地域において大量生産が行なわれはじめたのが19世紀初頭である。そしてこの19世紀初頭に大量生産を達成したのが、現在のキッコーマン・ヤマサの前身である、野田しょうゆ・銚子しょうゆである。本プランでは、17世紀の畿内地域におけるしょうゆ醸造業の発展について問いを出した後、19世紀初頭の江戸周辺地域における大量生産（＝資本主義的生産）のはじまりについて問う。17世紀時点でしょうゆ醸造を開始したにすぎなかった野田・銚子しょうゆが、19世紀初頭に大量生産を達成するまでの経過こそが資本主義的生産の成立過程である。そしてまた、この17-19世紀におけるしょうゆ醸造業にかかわる具体的なことがらの変遷を明らかにすることこそが、本プランにおける指導の根幹である。それゆえ、本プランの対象とする時期および区分は早期に明確にする必要がある。

17世紀に経済活動の中心となり全国市場形成の原動力となったのは、大坂を中心とする畿内地域だった。畿内が経済活動の中心となりえたのは、16世紀以降文化の中心として繁栄した京都市場における需要を満たすために、商品作物栽培が行なわれたからだだった。商品作物栽培が畿内に限定されていた中で、参勤交代制の施行を経た17世紀の後半以降江戸は巨大都市へと成長した。巨大都市のぼう大な需要をまかなうことは困難であったため、畿内から多くの物資が江戸へ送られた。これら物資を下りものという。第1問では、江戸におけるしょうゆの需要が下りもの（下りしょうゆ）によってまかなわれたことを問う。この問いを通して、17世紀の江戸周辺では江戸におけるしょうゆ需要をまかなうことが不可能であったことが理解される。あわせて、問いにたいする解説のなかで、しょうゆの製造法の概略を述べる。この概略の提示により、原料となる商品作物にたいする注意を喚起する。

第2問では、しょうゆ醸造業で資本主義的生産の達成された時期を問う。冒頭の課題でたずねた、キッコーマン・ヤマサといった企業による大量生産が、それぞれの前身である野田・銚子しょうゆによって、19世紀初頭に開始されたことを知ってもらおう。この第2問を通して、「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」と題する本プランが、17-19世紀の時期を対象とし、生産の発展を主たる内容とすることを明らかにする。

17世紀の江戸のしょうゆ需要をまかなうことを不可能とした要因は、18世紀中に改善された。18世紀には新田開発が頭打ちとなり耕地面積増加は停滞し、小規模農家の自立も頭打ちとなり人口増加も停滞した。このような中江戸周辺の人びとは農業技術の改善により土地生産性を上昇させた。この上昇による生産増加分の多くは、大豆・小麦・綿といった商品作物で占められた。第3問では、農業技術の改善による江戸周辺での商品作物栽培のはじまりについて

問う。この問いを通して、年生産物の増加が達成されたこと、農村に貨幣経済が浸透しはじめたこと、野田・銚子しょうゆといった江戸周辺醸造家の発展の基礎が整えられたことが理解される。

18世紀の江戸周辺地域における商品作物栽培の増加としょうゆ醸造業の発展により、下りしょうゆは江戸市場における優位を失った。そして19世紀には、江戸周辺醸造家の野田・銚子しょうゆのあいだで、江戸市場をめぐる争いが活発化した。両者の争いは、水運に勝る野田しょうゆの優位の確立という形で幕が閉じられた。しかしこの争いに敗れた銚子しょうゆの売り上げは、大きく変わることはなかった。銚子しょうゆは、原料を購入していた農村でしょうゆを販売することが可能だったからである。商品作物の栽培によって貨幣収入を得ていた農民の中に、しょうゆを購入する者が存在していたのである。17世紀の畿内にはじまる、日本における貨幣経済の発展は、商品作物栽培のひろがりを中心として、19世紀には農村地域に波及していた。第4問では、問題に先立つお話として、野田しょうゆに優位をもたらした商品流通における水運の重要性について述べる。その後野田しょうゆとの争いに敗れた銚子しょうゆの売り上げ維持の原因について問うことにより、農村での貨幣経済の浸透についての理解をめざす。

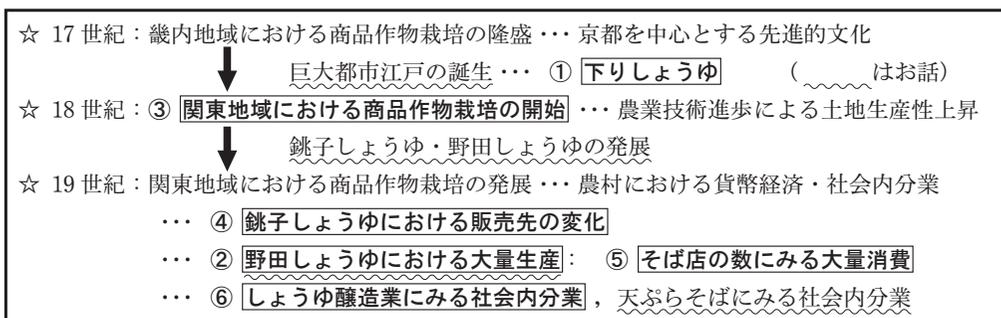
商品作物栽培の達成には貨幣経済の発達が不可欠である。また、商品作物栽培の発展により、特定農産物への特化やしょうゆ醸造業の発展といった、社会内における分業が進められる。17-19世紀における農業生産の増加は、商品作物栽培の発展にともない、貨幣経済と社会内分業が、畿内→江戸→江戸周辺農村へと波及してゆく過程としてまとめられる（江戸周辺以外の地域への波及は、本プランにおいては扱わない）。

銚子しょうゆとの争いに勝利した野田しょうゆによりしょうゆの大量生産が行なわれた。野田造醤油仲間の茂木佐平治家では約1万石（約12.5万人分の年間消費量）のしょうゆが生産された。大量生産の達成のため19世紀には、大規模醸造家によりマニユファクチュアも行なわれた。大量生産の達成によって江戸の人びとの食生活にも変化がみられた。19世紀初頭の江戸には4,000軒ものそば店が見られた。第5問では、そば店の数を問うことを通して、しょうゆ醸造業における大量消費、さらにはそれを可能とした大量生産の達成という事実を知らせる。そして第5問の解説中で、江戸の一般家庭の家計費割合を示す資料を示し大量消費という事実を補強する。

第6問では、しょうゆ醸造業にかかわる社会内分業のありようについて問う。大豆・小麦・塩といった原料や樽などの確保があつてはじめて、しょうゆの大量生産は可能となる。それゆえ社会内分業の確立は、資本主義的生産に不可欠である。発酵において熱をとまなうしょうゆ醸造では、大規模に生産されることで発酵が促進される¹⁹⁾。また、大量生産はそれ自体生産効率を高める。すなわち、しょうゆ醸造業は、大量生産に適した業種である。原料や樽の確保は、それら原料や樽を用いた大量生産を導き、さらには、より規模を拡大した大量生産の起点となる。資本の有する自己増殖の機能が、しょうゆ醸造業に見られるのである。

最後にお話として、天ぷらそばをとり上げる。1つの業種の発展は他業種とのかかわり無くしては起こりえない。しょうゆ醸造業の発展と時を同じくする漁業・製油業（さらには蔬菜業・みりん醸造業・かつお節製造業）などの発展が、天ぷらそばの誕生には不可欠である。それゆえお話では、19世紀初頭の江戸における天ぷらそばの登場について述べることで、しょうゆ醸造業以外の業種をも含んだ社会内分業のありようについて理解を深める。

図2：経済史・醤油醸造業史・食物史における研究成果より導いた授業プランの骨格（□部分が問題）



3. 授業の概要

3.1 授業の構成

・授業プランの問題構成

前節2.2における考察をふまえ、本プランでは以下図3に示した問題構成を採用した。それぞれの問題における目標も図3に示した。大学における授業実践の成否を検討するにあたり、それぞれの問題における目標の達成がなされたか否かということが、この検討に際しての指針となる。

図3：本稿授業プランの問題構成と問題ごとの目標

- 課題：生徒各々の家庭で用いられているしょうゆの、銘柄と産地を調べる
 ・目標・・・キッコーマン・ヤマサあるいはヒゲタといったしょうゆ醸造企業が、すべて同一の県に源を発するものであることを知ってもらう。
 ↓さらに
 しょうゆという商品の大量生産の達成には、何らかの要因が存在したことを暗示する。
- 第1問：江戸におけるしょうゆの需要が下りものによってまかなわれたことを問う。
 ・目標・・・17世紀の江戸周辺では、江戸におけるしょうゆ需要をまかなうことが不可能であったことを理解してもらう。
- 第2問：しょうゆ醸造業で資本主義的生産の達成された時期を問う。
 ・目標・・・キッコーマン・ヤマサといった企業による大量生産が、それぞれの前身である野田・銚子しょうゆによって、19世紀初頭に開始されたことを知ってもらう。
 ↓さらに
 本プランが、17-19世紀の時期を対象とし、生産の発展を主たる内容とすることを明らかにする。
- 第3問：農業技術の改善による、江戸周辺での商品作物栽培のはじまりについて問う。
 ・目標・・・18世紀に年生産物の増加が達成されたこと、農村に貨幣経済が浸透しはじめたこと、野田しょうゆや銚子しょうゆといった江戸周辺醸造家の、発展の基礎が整えられたことを理解してもらう。
- 第4問：野田しょうゆとの争いに敗れた銚子しょうゆの売上維持の原因について問う。
 ・目標・・・農村地域における貨幣経済の浸透について理解してもらう。
- 第5問：19世紀初頭の江戸における、そば店の数を問う。
 ・目標・・・しょうゆ醸造業における大量消費、さらにはその大量消費を可能とした大量生産の達成という事実を知ってもらう。そして、これとあわせて、江戸の一般家庭における家計費の割合を示す資料を提示し、大量消費という事実を補強し、しょうゆの消費拡大についての理解を深めてもらう。

第6問：しょうゆ醸造業にかかわる社会内分業のありようについて問う。

・目標・・・大量生産に不可欠な、大豆・小麦・塩といった原料や樽などの確保といった社会内分業の確立について、具体例を通して理解してもらおう。

・大学における授業実践の概要

「はじめに」に述べたように、本プランは、2つの大学で実験授業が行なわれている。A大学では「現代社会と生活」、B大学では「家庭科教育法」という講義中の、2コマの授業時間（両大学ともに1コマは90分）を担当教員の許可を得て、筆者が授業実践を行なった。

授業の冒頭に、授業の目的として「資本主義的生産とは何か」をとともに考えることをあげた。この考察を通じて「現代社会を考察するための1つの切り口を提供する」ことも授業の目標であると、(学生にたいし)あわせて述べた。

授業への参加人数は、A大学では1回目64名・2回目66名、B大学では(集中講義中の連続した時間だったので)2回とも22名だった。2コマの授業時間内で、以下に示す内容の授業プリントを1枚ずつ配布し、問題提示・質問・説明を行なった。授業の補足として、授業プリントと同じ内容のOHPを提示しつつ適宜板書を行なった。

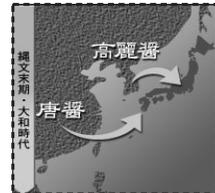
1コマ目の授業は、A・B両大学ともに(本プランの)第3問で終了した。1コマ目・2コマ目それぞれの授業の終わりに、学生から(授業者の用意した用紙に)感想を書いてもらった。感想用紙の総数は、両大学で174枚であった。

3.2 授業プランの内容

授業プラン p.3

課題 みなさんの家庭で使われているしょうゆの、銘柄と産地を調べてください。

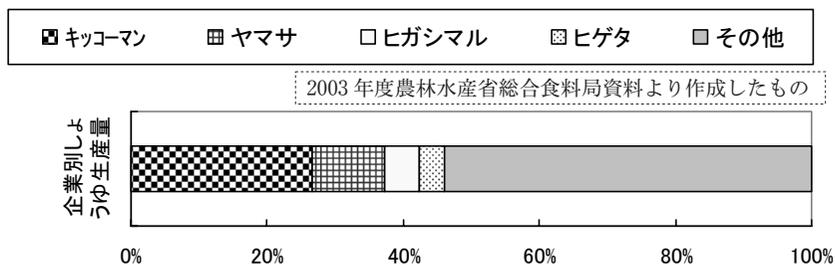
キッコーマンしょうゆホームページより



授業プラン p.4

解 説

現在あるしょうゆ醸造業者のうち、1位と2位の会社は、下のグラフが示すように、キッコーマンとヤマサです。両社はともに、千葉県に位置しています(4位のヒゲタも千葉県に位置しています)。



授業プラン p.6

第1問 巨大都市となりはじめた17世紀後半の江戸でも、しょうゆは愛用されました。

江戸で用いられたしょうゆは、どこで製造されたでしょう？

1. 江戸周辺
2. 大坂周辺
3. 全国各地

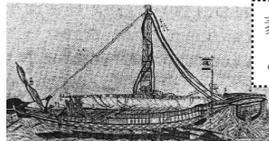
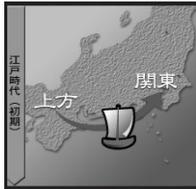
(俣角長 紹介パンフレットより)

授業プラン p.7

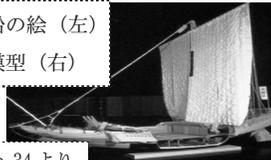
解説

商品としてのしょうゆが16世紀の末につくられていた大坂周辺の地域では、しょうゆの原料となる大豆や小麦の栽培が行なわれていました。しかし、江戸周辺地域では、新田開発により耕地は増加していたものの、江戸の人びとの必要を満たすほど、大豆や小麦の栽培が行なわれてはいませんでした。

江戸で用いられたしょうゆは、畿内地域でつくられた「下りしょうゆ」によって占められていました。しょうゆの他にも、多くの商品が大坂から江戸へ送られました。これらの商品を「下りもの」といいました。下りものは、菱垣廻船と呼ばれる船によって、運ばれました。

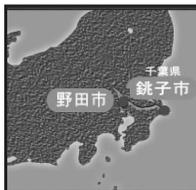


菱垣廻船の絵 (左)
と復元模型 (右)



『キッコーマン株式会社八十年史』[2000] p.34より

キッコーマンしょうゆホームページより



江戸周辺地域では、銚子や野田でしょうゆ醸造業がはじまったばかりでした。銚子しょうゆは後のヤマサの前身で、野田しょうゆは後のキッコーマンの前身です。

授業プラン p.8

第2問 千葉県のような江戸（東京）周辺地域で、しょうゆが工場で大量につくられるようになったのはいつからでしょう？

1. 「江戸時代」中期の18世紀中盤
2. 「江戸時代」後期の19世紀前半
3. 「明治時代」初期の19世紀後半



大蔵永常『広益国産考』より

授業プラン p.9

解説

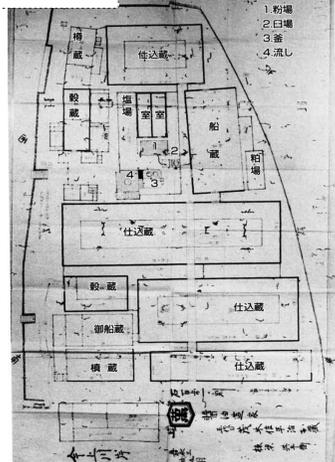
キッコーマン・ヤマサの前身である、野田しょうゆ・銚子しょうゆでは、19世紀初頭に、マニュファクチュア（工場制手工業）とよばれる生産の方法が行なわれるようになっていました（下の図）。この方法は、下の図のような広い作業場の中で、生産に必要な1つ1つの作業を分けて行なうものです。作業がすべて人力によって行なわれていますが、p.5に示した現代の機械化された工場と、作業の工程は全く変わりません。



4代勝文斎作 押絵扁額「野田醤油醸造之圖」[1877]野田市郷土博物館蔵

マニュファクチュアの採用によって、大量なしょうゆが生産されるようになりました。しょうゆ醸造業では、「江戸時代」後半の19世紀初頭に、現代に通ずる大量生産がはじめられていたのです。

19世紀初頭に江戸周辺地域で大量なしょうゆが生産されるようになったため、畿内地域からの下りしょうゆは、江戸では、ほとんど見かけられなくなっていました。



野田市郷土博物館編集発行『野田の醤油づくり』[2001] p.3より

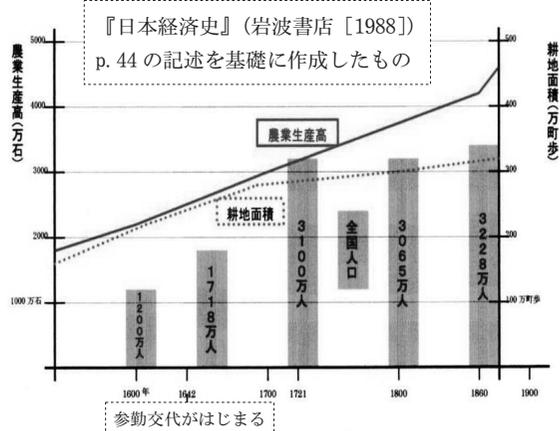
醤油蔵絵図 嘉永3年(1850)に描かれた醤油蔵の絵図面。今上村の江戸川畔にあった茂木佐平治家出蔵。画面左(西)が江戸川で、ここから出荷した。画面下(南)は今上河岸(野田下河岸)。

授業プラン p.10

第3問 右のグラフは、17-19世紀間の、人口・耕地面積・農業生産量をあらわしたものです。

18世紀の動きとして、どのようなことが言えるでしょうか？

また、そのような動きは、なぜおこったと考えられるのでしょうか？

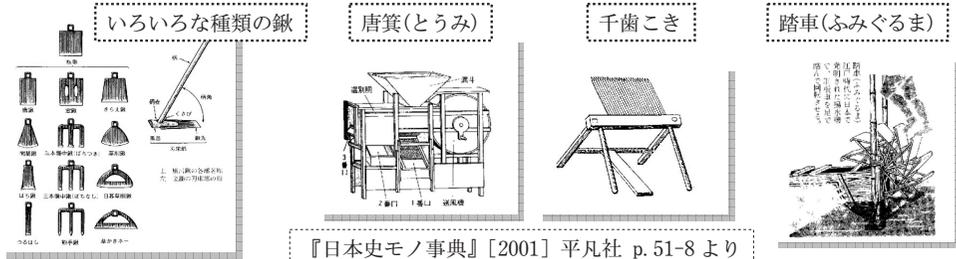


授業プラン p.11

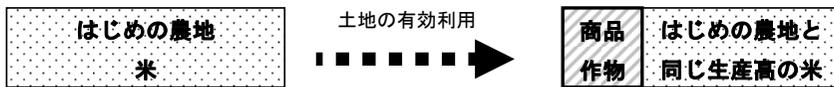
解説

p.10のグラフを見ると、18世紀には、耕地面積や全国人口の増加が停滞している一方で、農業生産高が一定の割合で増加していることがわかります。

18世紀には、下図の道具に見られるように、農業技術が進歩し土地生産性が上昇しました。

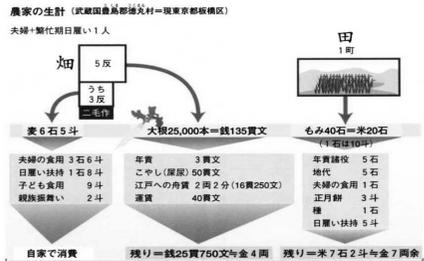


土地が有効利用されるようになり、農業生産量が増加しました。しかし、人口増加が停滞しているため、米を大量に栽培しても農家の利益にはつながりません。一方で、この時期には農村でもお金が使われるようになっていました。必要なお金を用意するため、お金に換えることが可能な作物が栽培されるようになったのです。このような作物を、「商品作物」といいます。



右の図を見ても、農家の土地が有効利用され、商品作物の栽培が行なわれたことがわかるでしょう。

市川寛明編『一目でわかる江戸時代』
小学館 [2004] p.15 より

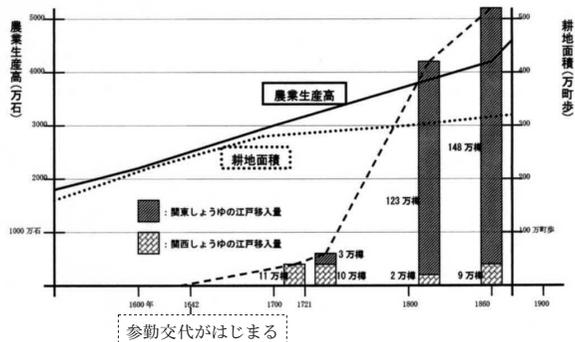
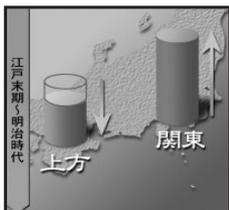


授業プラン p.12

お話

前のページで述べたように、18世紀以降江戸周辺の農村でも、商品作物の栽培が行なわれるようになりました。しょうゆの原料となる大豆や小麦の栽培も行なわれました。原料が確保されるようになったことで、(銚子や野田など)関東しょうゆの生産は増加し、下りしょうゆは減少しました。

キッコーマンしょうゆホームページより



関東しょうゆのうち、18世紀中に他に先がけて生産量を伸ばした地域は、いわし漁業で栄えた銚子しょうゆ（後のヤマサ）でした。銚子でのしょうゆづくりは、しょうゆの原産地といわれる紀州湯浅（和歌山県）から伝えられたと言われています。

銚子より遅れてしょうゆ醸造をはじめた野田しょうゆ（後のキッコーマン）は、江戸への水運の有利さを生かし、大きく生産をのばしていました。その結果、19世紀には、銚子と野田しょうゆの間で、江戸での販売をめぐる争いが激しくなりました。



◀銚子から江戸への輸送は、房総沖をまわる海路が時間的には早いですが、難破の危険が高かったため、利根川をさかのぼるコースを使うことがほとんどだった。

原田信男編『江戸の料理と食生活』[2004] p. 95 より

授業プラン p. 13

第4問 銚子しょうゆと野田しょうゆのあいだの争いは、野田しょうゆの優位の確立という形で幕を閉じました。しかし、敗れた銚子しょうゆの販売量は、ほとんど変わりませんでした。なぜ変わらなかったのでしょうか？



キッコーマンしょうゆ
ホームページより



ヤマサしょうゆ
ホームページより

授業プラン p. 14 (上部)

解説

19世紀になると、農村の人々も、商品作物の栽培でお金を手にするようになっていました。江戸で人気となっていた銚子しょうゆを買おうという人びとが、農村にはいました。しょうゆが普及するのに対応して、農村には江戸の料理書がひろまっていきました。

1803 (享和3) 年刊
『素人庖丁』



原田信男編『江戸の料理と食生活』[2004] p. 132 より

授業プラン p. 14 (下部)

お話

江戸での優位を確立した野田しょうゆでは、大規模な生産が行なわれました。茂木佐平治家（野田しょうゆのうちで後のキッコーマンとなった醸造家）では1万石（約12.5万人分の年間消費量）の生産が行なわれました。

しょうゆの製造工程には発酵が含まれます。大量に仕込んだほうが外気の影響を受けにくく、発酵の際に発生する熱を保つことができたので、より理想的な発酵を行なうことができました。

しょうゆ醸造は、大規模な生産に適した業種と言えます。





歌川広重画『大日本物産図会』1877(明治10)年より

野田市郷土博物館編集発行『野田の醤油づくり』[2001] p. 15



授業プラン p. 15

第5問 19世紀初頭、人口約100万人の江戸に、そば屋は何軒あったのでしょうか。ただし、屋台で営業していたそば屋は、含みません。

ちなみに、人口約1160万人の現代の東京には、約5000店のそば屋があります。

1. 約500店 2. 約1,000店 3. 約4,000店



『江戸の料理と食生活』 p. 118より

授業プラン p. 16

解説

大規模なしょうゆ生産の結果、そばの大量な消費が行なわれるようになりました。19世紀初頭人口約100万人の江戸には、約4000店のそば屋があったそうです。そばは屋台でも売られました。



『江戸の料理と食生活』 p. 122より

屋台のそばは、川柳の題材になりました。

2つほど例を示しましょう。

夜そば切ふるへた声の人だかり

(『柳多留』初編 明和2[1765]年)

夜そば切おまけに^{ひと}ちぎりはさみ出し

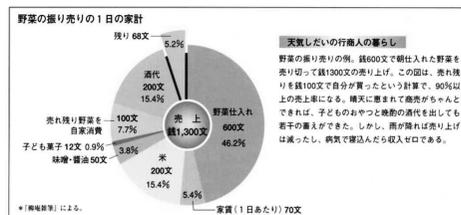
(『川柳評万句合』明和元[1764]年)

また、家庭で用いられる調味料としても、しょうゆは使われました。19世紀、江戸の人々の生活に欠かせないものであったしょうゆは、下の図のような「振売り商人」によって、売られました。



キッコマンしょうゆホームページより

市川寛明編『一目でわかる江戸時代』小学館 [2004] p. 15より



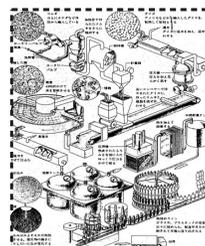
しょうゆは家庭の中でも、使われました。上の家計費を示す図にも、しょうゆが登場しています。(「江戸時代」の4文が現代の100円に相当すると言われています)

授業プラン p. 17

第6問 しょうゆの大規模な生産にとって、不可欠な条件とは何でしょう？

現代におけるしょうゆの大量生産の基本的なしくみ

小学館『大日本百科事典』より



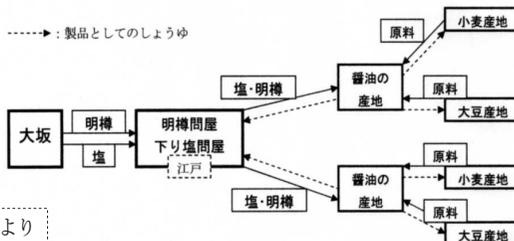
授業プラン p. 18

解説

しょうゆを大量に生産するには、原料や樽などの、安定かつ大量な供給が不可欠でした。野田や銚子などの関東しょうゆは、大豆・小麦を周辺農村から購入し、明樽・塩を大坂からの下りものでまかかっていました。



『キッコーマン株式会社八十年史』[2000] p. 34 より



原料や樽などの輸送は、高瀬舟と呼ばれる船（下図）によって行なわれました。原料や樽などの輸送に向かう高瀬舟にはしょうゆが積まれました。高瀬舟は、行きにしょうゆを積み、帰りに原料や樽などを積んで帰ってきたのです。

授業プラン p. 19

お話

19世紀の人々の生活を記したとされる『守貞謄稿』には、次のような記述があります。

今世、三都ともに土民奢侈を旨とし、特に食類に至りては、衣服等と異にして、貴賤貧富の差別なきがごとし。(中略)、江戸は専ら鯉節だしに味醂酒を加へ、あるいは砂糖をもつてこれに代へ、醤油をもつて塩味を付くる。(p. 208)

塩味をつけるのに、しょうゆは欠かせないものだったといえるでしょう。「文化文政期」と呼ばれる19世紀前半の江戸では、商品としてのしょうゆを中心として、数多くの食べ物、江戸の人びとのあいだに広まりました。19世紀初頭には、商品作物の栽培を基礎に、食に関係するさまざまな業種が成立していたのです。



『江戸の料理と食生活』小学館 [2004] p. 31 より (両図とも)

再びそばに目を向けてみましょう。19世紀初頭の江戸では、天ぷらそばも食べられるようになりました。この天ぷらそばの登場は、(しょうゆ醸造業以外の) 漁業や製油業などの、さまざまな業種の発展を意味しています。

「貴賤貧富の差別なきがごとし」といわれた、19世紀初頭の食類の発展は、しょうゆ醸造業を中心とした、さまざまな業種の発展によって達成されたとと言えるでしょう。



4. 感想文を基礎とした実践の評価

本稿 3. 1 で述べたように、A・B 両大学における授業実践の結果、合計 174 枚の感想文をもらうことができた。感想文の用紙は A5 サイズのものを使用し、「感想」「質問」「要望・批判」という 3 つの項目ごとに感想をもらった。

すべての項目（「感想」「質問」「要望・批判」）に答える必要はないとあらかじめ述べていたが、多くの学生が感想用紙の項目に複数の記述をしてくれた。1 人の学生が多くの事柄について感想を述べた場合も多数あったので、多岐にわたる内容の感想を見ることができた。

本稿 3. 1 で示した問題ごとの目標にかかわる感想は、それぞれの問題ごとで複数得られている。それゆえ、4. 1 では（感想文の中から抜粋した）それぞれの問題にかかわる感想の内容をもとに、実践の成否について検討する。また、それぞれの問題の内容には直接関係しない感想も多数得られた。これらの感想の中には興味深いものも多数見られる。それゆえ、4. 2 ではこれら総括的な内容の感想のいくつかを抜粋し今後の課題となる事柄について検討する。

4. 1 問題ごとの感想から考察される実践の評価

- ・課題：生徒各々の家庭で用いられているしょうゆの、銘柄と産地を調べる
- ・目標：キッコーマン・ヤマサあるいはヒゲタといったしょうゆ醸造企業が、すべて同一の県に源を発するものであることを知ってもらう。
↓さらに
しょうゆという商品の大量生産の達成には、何らかの要因が存在したことを暗示する。

上の“要因の暗示”にかかわる感想として、以下のようなものが見られた。

- ・しょうゆの生産量が 1 番多いのが千葉県だということをしらなかったのが少し驚いた。SM (A 大学)
- ・現在、一般に使われているしょうゆの 40% も一部の地域、千葉県に集中していることに驚きました。千葉県は別に畑がたくさんあったり工場がたくさんあるというイメージもなかったのが不思議です。SY (A)
- ・「ヤマサ」「キッコーマン」の主流になっている醤油メーカーが千葉県にあるのはしらなかったのが驚きました（関西方面だと思っていたので・・・）。KS (B 大学)

上の感想からは、（現代の）しょうゆ生産の約 40% が千葉県で行われていることにたいする驚きが察せられる。この“千葉県への集中”たいする考察が、「技術が進歩し大阪の方から

伝わったから、ということですか」のような形でなされていることから、“要因の暗示”は成されたといえるだろう。

一方で以下の感想からは、課題の“要因”以外の事柄も“暗示”されている。

- ・しょうゆの銘柄を、こんなに真剣に考えたことがなかったので、意外に多いものだと思います。MA (B)
- ・トモエはどう外にも商品を出しているのですか？地域限定で販売されているしょうゆはありますか？TR (A)
- ・身近にもしょうゆの工場があることなど、知らないことだらけでした。TR (A)
- ・(質問) しょうゆを販売する企業が多くなり始めたきっかけは何でしょうか？(単に需要がのびたからでしょうか?) SK (A)

上に示した「しょうゆを販売する企業が多くなり始めたきっかけは何でしょうか？」との質問は、2コマ目の授業で述べられる流通経路の確立や大量消費の達成に通ずる内容に通ずるものである。本稿2.1で述べた資本主義的生産の要件にかかわる質問が出された点で、最初の課題は適切といえるだろう。

- ・第1問：江戸におけるしょうゆの需要が下りものによってまかなわれたことを問う。
- ・目標：17世紀の江戸周辺では、江戸におけるしょうゆ需要をまかなうことが不可能であったことを理解してもらう。
- ・学生の解答
 1. A大学) 3人, B大学) 0人・・・100万人もいたらつくりはじめる人もいだろうから
 2. A) 多数, B) 多数・・・しょうゆづくりは京都ではじまったから
 3. A) 1人, B) 3人・・・はじめの資料(p.4)を見たら全国でつくられていたから

原材料としての小麦・大豆に加え、発酵を必要とするため、初期におけるしょうゆ醸造地域は限定されていた。この商品作物の栽培と発酵技術という、しょうゆ醸造業に特有の成立要件を理解するためには、製造工程にたいする(大まかな)理解は不可欠である。それゆえ、第1問に先立つお話として、しょうゆの製造工程と17世紀の経済発展の概略が述べられている。お話における製造工程にたいする理解は「しょうゆを作る過程がこんなにもあるなんて知らなかったのが驚きました。YO (A)」との感想から察せられる。

第1問の正解率は、両大学ともに高かった。「しょうゆづくりは京都ではじまったから」との学生の解答にあるように、第1問に先立つお話の冒頭で16世紀の末に京都でしょうゆが商品化されたことを述べていたことが正解率を上げることとなった原因だろう。「しょうゆは江戸ではなく大阪で製造されていたというのがとても意外でした。AT (A)」との感想もみられたことから、お話の中でしょうゆの商品化の始まりについての記述がなかったならば、学生の解答分布は変化していただろう。

プラン冒頭の課題では千葉県で現代のしょうゆ生産が突出していることを述べた。この課題に続く第1問では、17世紀のしょうゆ生産が関西地域を中心に行なわれていたことを問題の内容とした。17世紀から現代の間におこったしょうゆ生産にかんする変化を意識してもらうことが、第2問以降の問題提示にあたって不可欠である。以下の感想からは、課題から第1問へといたる順次性の(当面の)正しさが示されるだろう。

- ・ (質問) 今千葉に生産が集中しているのは、技術が進歩し大阪の方から伝わったから、ということですか。UA (A)
- ・ (質問) 18 世紀や 19 世紀には、日本のどこでもしょうゆの生産が行なわれていたのですか?MS (A)

・ 第 2 問：しょうゆ醸造業で資本主義的生産の達成された時期を問う。

- ・ 目標：キッコーマン・ヤマサといった企業による大量生産が、それぞれの前身である野田・銚子しょうゆによって、19 世紀初頭に開始されたことを知ってもらう。

↓さらに

本プランが、17-19 世紀の時期を対象とし、生産の発展を主たる内容とすることを明らかにする。

・ 学生の解答

1. A) 0 人, B) 0 人
2. A) 1 人, B) 1 人 … 17 世紀に商品生産がはじまったなら、19 世紀くらいには大量生産してもおかしくはないのではと考えたから。
3. A) 多数, B) 多数

第 2 問の提示に先立って、千葉県で現代のしょうゆ生産が突出していること、17 世紀のしょうゆ生産が関西地域を中心に行なわれていたことが述べられている。資本主義的生産の成立過程を主たる教育内容とした本プランで、しょうゆ醸造業ではじめて資本主義的生産が行なわれた時期を特定することは不可欠な事柄である。2. 2 で述べたように、野田の茂木佐平治家では 19 世紀前半に約 1 万石 (約 12.5 万人分の年間消費量) のしょうゆが生産されマニュファクチュアが達成されていた。この 19 世紀前半がしょうゆ醸造業で資本主義的生産の達成された時期といえる。しかし、「工場で大量に」との設問の表現から、機械化された現代の工場 (に近いもの) を想像する学生が多く、「明治時代」と表記した選択肢 3 に解答が集中することが予想された。

実際、第 2 問の正解率はきわめて低かった。「マニュファクチュアという知っている言葉がでてくると少し嬉しくなりました。SR (B)」との感想もあることから、マニュファクチュアの名を知る学生は多かったようであるが (解説文にマニュファクチュアを見つけ、反応している学生も何名かいた)、これを大量生産のはじまりと理解する学生は少なかったようである。学生のマニュファクチュアにたいするこのような認識は、以下の感想に示される。

- ・ こんな昔から大量生産しようとしたなんて、少し信じ難い。YA (A)
- ・ 千歳の工場に行ったことがあるので、しょうゆ作りは現代の機械を用いての形がとても強いイメージでした。MA (B)

しかし、上に述べたような、マニュファクチュアにたいする理解不足は、解説および補助資料によって解消されたようである。このことは、以下の感想に示される。

- ・ しょうゆをマニュファクチュアでつくる工程を絵で見れて、それがイメージできて、良かったです。TT (B)
- ・ 醤油蔵絵図と野田醤油醸造之図は初めて見た。19 世紀といえども、絵図面がこんなにもしっかりと書かれているというのは、凄いと思った。KA (B)

- ・江戸時代のマニファクチュアの形の押絵を見ることができ、人力の作業の方法を知ることができました。又、現代との作業工程は全く変わらないということに驚きました。MA (B)

ただし一方で、本プランでは、マニファクチュアの内部で働く人々についての記述がなされてはいない。以下のような感想に答えるためには、何らかの記述が必要と思われる。

- ・マニファクチュアによる大量生産は聞こえはいいが、その時代の人はずごく大変だったと思う。AY (A)
- ・(質問) 手工業で過労死 (もしくはケガ・病気) ということがあったりしたのでしょうか? UY (A)
- ・**第3問: 農業技術の改善による、江戸周辺での商品作物栽培のはじまりについて問う。**
- ・目標: 18世紀に年生産物の増加が達成されたこと、農村に貨幣経済が浸透しはじめたこと、野田しょうゆや銚子しょうゆといった江戸周辺醸造家の、発展の基礎が整えられたことを理解してもらう。
- ・**学生の答え(グラフからわかること)**
人口・耕地面積が増えていないのに、農業生産高が増加した。
- ・**学生の答え(農業生産が増加した理由)**
機械化したのでは?あるいは、技術的な進歩があったのでは?
効率が良くなった。人々が勤勉になった。

第2問までの提示により、しょうゆ醸造業における大量生産が、17世紀から19世紀の期間に達成されたことが明らかとされた。この期間の中間にあたる18世紀における江戸周辺での商品作物栽培が理解されるならば、大量生産の達成の過程が(大まかに)理解されることになる。以下の感想からは、この過程の(大まかな)理解が達成されたことがうかがわれる。

- ・なぜ大坂で作られていたしょうゆが江戸で作られるようになったのか。ただ答えだけを出されるのではなく、順を追って答えを出したのですごく理解できた。SM (A)
- ・時代によって生産量の変化やその変化を起こした理由なんかもあって楽しくきけた。SK (A)
- ・技術が進歩し、生産高が上がっていくというグラフは時代背景と合わせて考えてみると楽しかったです。土地はなくても人口と技術で進歩していく所が今の日本と似ている気がしました。RA (A)
- ・しょうゆ1つでその時代の歴史背景までわかって驚きました。とても楽しかったです。OY (A)
- ・しょうゆの歴史から日本の経済が見えてくるとは思っていなかったので、すごく興味を持って話を聞くことができました。ZM (A)

第3問にかんして、目標は達成されていると思われる。しかし、「お金を使うようになってから、お金の換えるための商品作物が栽培されるようになったことを詳しく知りたいです。SM (A)」との要望も見られた。この要望は、商品作物という事柄にたいするより詳細な説明を求めたものといえる。

マニファクチュアや商品作物といった語句は、中学校の歴史教科書にも用いられている語である。しかし、第1問の考察で述べたように、マニファクチュアという事柄について学生は、名は知っているものの正確に理解しているとはいえなかった。同様な理解の浅さが、商品作物についてもあてはまるのではないか。農業生産増加の理由についての学生の解答から商品

作物の名が出なかったことから、授業実践前の学生が商品作物について理解していなかったことが示されるとともに、上記SMさんの感想からも商品作物に対する理解の不十分さが指摘されるだろう。プランの改訂について検討するにあたり、商品作物の理解が重要な考察点となるだろう。

- ・お話：関東しょうゆの売上増加。水運における野田の優位。
- ・第4問：野田しょうゆとの争いに敗れた銚子しょうゆの売上維持の原因について問う。
- ・目標：農村地域における貨幣経済の浸透について理解してもらう。
- ・学生の答え

銚子は海から江戸以外のどこかへ販売した。

しょうゆをつくる時のコストが安かった。新たな製法が行なわれた。

野田しょうゆとの争いに敗れた銚子しょうゆの売上が維持されたのは、大豆や小麦の取引を行っていた農村地域でしょうゆが購入されるようになっていたからであった。すなわち、農村ではしょうゆの購入が可能なほどに貨幣経済が浸透していたことになる。この貨幣経済浸透の基点となるのが商品作物の栽培である。

問題3で、18世紀以降の農業生産増加の要因として、商品作物栽培のひろがりということが述べられていた。それゆえ問題4においても、銚子しょうゆの売上維持の原因として、商品作物栽培のひろがりや学生の解答あるいは感想から得られることが望ましい。しかし、お話・問題における銚子しょうゆと野田しょうゆの争いにかんして、下のような感想により興味が示されているものの、商品作物とのかかわりで記述されているものはみられない。

- ・銚子しょうゆと野田しょうゆの話が興味を引きました。しょうゆ1つをとってもこんないろいろな歴史があるのはすごいなと思いました。MS (A)
- ・やはり、昔も、現代も、製造会社同士での争いは、あるのですね。きっと争いがあるからこそ、よいものを作ろうとするので、味もだんだんおいしくなっていくと思います。SK (A)
- ・銚子しょうゆと野田しょうゆで争いがあり、銚子が敗れ、でも、頭を使って、販売量を下げることにはなかったことなどすごいと思った。負けてからの状況を生かしての行動は、見習うものがあると思う。KS (A)
- ・銚子しょうゆと野田しょうゆの争いで、結果は野田しょうゆが勝ったが、銚子しょうゆは破れたが販売量はほとんど変わらなかった。たくさんのお考えがあり、工夫をしたりしていると感じた。生産するために、たくさんのお力があつた。何気なく使っているしょうゆだが、大変な努力があり、今にいたるのだとも感じた。SS (B)

上の感想を見る限り、目標としていた農村地域における貨幣経済の浸透についての理解という形で述べられていない。第3問（及び解説）の提示後も、商品作物栽培についての理解が達成されていないことが、農村地域への貨幣経済の浸透へ学生の思考が到達しない理由と思われる。

- ・お話：野田における大量生産。
- ・第5問：19世紀初頭の江戸における、そば店の数を問う。
- ・目標：しょうゆ醸造業における大量消費、さらにはその大量消費を可能とした大量生産の達成という事実を知ってもらう。そして、これとあわせて、江戸の一般家庭における

家計費の割合を示す資料を提示し、大量消費という事実を補強し、しょうゆの消費拡大についての理解を深めてもらう。

・学生の解答

1. A) 2人, B) 1人
2. A) 多数, B) 多数
3. A) 5人, B) 1人

19世紀初頭の江戸におけるそば屋の数には、多くの学生が驚きを示していた。大量消費という事実が、この問題を通して伝えられたといえる。問題における目標は達成されているだろう。

口頭で述べた、そば屋が“デート場所”として利用されたという事実にも、驚きを示していた。そば屋が“デート場所”だったという記述も、解説に加えられて良いだろう。

また、円グラフにより示した、家計費に占めるしょうゆの費用にたいして、以下のように多くの学生が感想を寄せていた。

- ・今では安くて、おいしくて、早いそば屋も、昔はしょうゆが高値だったため、今のように「ただのそば屋」というイメージはなかったと思う。HM (A)
- ・現在にくらべて昔はしょうゆがきちょうで、1日千円くらいしょうゆのためにつかうのはすごいと思った。MM (A)
- ・今は当たり前のように毎日くちにしているものでけど、しょうゆが高級品だったということにも驚いた。CN (B)
- ・今では特に高くもないしょうゆだが、江戸時代では貴重な調味料であったのだと感じた。YA (B)
- ・昔と今の“しょうゆ”の価値観も違ったのだと感じました。MA (B)

上記の感想では、いずれも、高級品としての(19世紀における)位置づけが述べられている。これらの感想を、より深めるための資料の提示が求められる。高級品でありながら大量に消費されたという事実が導き出されることによって、しょうゆを通して、19世紀における江戸周辺の人々の姿が、より確かなものとして導かれるだろう。

問題5についての感想の数は、他の問題に比べ格段に多かった¹³⁾。それらの感想はいずれも、上に述べたように、好意的な内容で書かれている。しかし、「しょうゆが大量生産されるようになり、そば屋も増えて、そのために原料などの生産も多くなるという流れ、需要と供給がわかった。今では特に高くもないしょうゆだが、江戸時代では貴重な調味料であったのだと感じた。AY (B)」との感想がみられる他は、大量生産とそば店の数の膨大さをつなぎ合わせた記述は数少ない。そば店の数の膨大さが学生に与えた衝撃は大きかったといえる一方で、大量生産の達成という事柄を考察の基礎にできなかったという点で順次性に問題を残している。

・第6問：しょうゆ醸造業にかかわる社会内分業のありようについて問う。

- ・目標：大量生産に不可欠な、大豆・小麦・塩といった原料や樽などの確保といった社会内分業の確立について、具体例を通して理解してもらう。

・学生の答え

小麦や大豆といった原料の確保

本プラン第4問では野田・銚子しょうゆによる大量生産の達成、第5問ではそば店の数を問う設問を通して大量消費の達成について述べた。最終問題となる第6問では、大量生産・大量消費の双方を可能とした条件となる原料の確保について問う。大量生産・大量消費の双方を可能とするためにはぼう大な量の原料や樽などが必要となるのは明白である。それゆえ、学生の解答からも正当が導かれることが予測された。

学生の解答では、上の予測どおり、原料の確保という正解が聞かれた。以下の感想をみても、第6問における目標の達成はなされたといえる。

- ・大量生産するための条件などは、しょうゆに限らずどんなものにも共通することだと思った。KN (A)
- ・原産地があり原材料があってそこから、製品がつくられて、私達に流通していくまでにたくさんの工程があることに興味も湧いてきました。TT (B)
- ・普段当たり前のように使っていたしょうゆも、昔では高級品であり、原料や労働者、消費者などの条件がそろって大規模に生産できるとわかりました。AN (B)
- ・しょうゆを大量に作るために大豆や小麦がなければいけないということがわかったし、しょうゆから色々なことにつながるといことがわかった。NK (B)

上の感想の他「生産→運搬→消費の“運搬”にも、船を使っていることから、日本の造船技術の高さ、海に囲まれているという自然条件など、色々自分の中で想像を膨らませることができました。FY (B)」との感想もみられた。第6問の内容は、FYさんの中でさらに深められている。

ただし、上の解答・感想の結果だけで、問題の妥当性を証明することはできない。授業の最後に、以下のような板書をおこない、授業のまとめとした。

図4：授業のまとめの板書

資本主義的生産：商品の大量生産	
・社会内分業	・年生産物の増加
・貨幣経済	・多くの人々による消費

上の板書にたいし、「話の締めが頭の中でつながりませんでしたが、定義をふまえた上で読み直すとながりました。UR (B)」との感想がみられた。“話の締め”に相当する部分は、第4問「銚子しょうゆにおける販売先の変化」・第5問「そば店の数にみる大量消費」・第6問「しょうゆ醸造業にみる社会内分業」・お話「天ぷらそばにかかわる社会内分業」間のつながりであろう。今後、第4問から6問・お話にかけての問題配列の順次性、あるいは設問の妥当性を改めて考察する必要がある。

一方、お話にかんしては以下のような感想がみられた。しょうゆからさらに天ぷらそばに目を転じることで、しょうゆ醸造業の発展とともに、食にかかわるさまざまな業種が発展していったことが、理解されたといえる。

- ・そばの生産の仕組みを通して、商品をつくる仕組みを学べてよかった。YM (A)
- ・しょう油ができたことで、日本の食文化がこんなにも豊かになったということを初めて知った。SM (A)

- ・ しょうゆが発展し, 普及することによって漁業などの他のことの発達にもつながったとわかりました。AN (B)
- ・ 消費と生産の関係は密接だということがわかっていたようで, ほとんどわかっていなかったということを感じた。FU (B)

4.2 総括的な感想の検討

前節 4.1 では本プランの問題に対応した感想を抜粋し授業の成否を検討した。しかし, 感想を書いてもらう際に特に条件はつけなかったため, 問題とは直接関係のない感想も多数得られた。これらの感想から有益な示唆を導くため, 本稿では以下のような方法を採用した。例を挙げて述べたい。

- ・ しょうゆの歴史をみていくことで, 資本主義的生産の成りたちを考えていくというのがおもしろかった。プリントもカラーの図などが多くわかりやすかった。DC (A 大学・前半)
- ・ 江戸にそば屋が 4,000 店もあったと知って驚いた。そばが人気だったことに加えて, 今より食べ物の店が少なかったからだろうと思った。この授業を通して, 今まで漠然としていた知識が繋がったように思う。TC (B 大学・後半)

DCさんの感想の中で, 「しょうゆの歴史をみていくことで, 資本主義的生産の成りたちを考えていくというのがおもしろかった」という部分は授業が楽しかったかということにかかわる内容であり, 「プリントもカラーの図などが多くわかりやすかった」という部分は授業の進め方にかかわる内容といえる。

TCさんの感想の中の「江戸にそば屋が 4,000 店もあったと知って驚いた」という部分は本プラン第5問にかかわる感想であるが, 「そばが人気だったことに加えて, 今より食べ物の店が少なかったからだろうと思った」という部分は後半終了時点での発展的な内容といえる (19世紀初頭時点での食生活の全体像を授業の中で提示したわけではないので)。また, 「この授業を通して, 今まで漠然としていた知識が繋がったように思う」という部分は, 授業を通して学んだことといえるだろう。

プランのそれぞれの問題に直接かかわらないこれらの感想を「総括的な感想」と呼ぶことにする。これら総括的な感想は, 本プランでは以下のように分類された。

図5：本プランにおける総括的な感想の分類

- | | |
|---------------|--------------|
| ・ 授業を通して学んだこと | ・ 授業は楽しかったか |
| ・ 自身にひきつけた感想 | ・ 授業の進め方について |
| ・ 発展的な感想・質問 | ・ その他の感想・質問 |

以下, 図5に示した分類に沿い, 感想の一部をとり上げる。

授業を通して学んだこと (前半 23 名, 後半 28 名)

- ・ しょうゆを通して, 過去の時代背景を学べて勉強になった。すぐわかりやすかった。SM (A 前半)
- ・ 2回を通して, しょうゆ1つを見るだけでこんなに時代背景を勉強できるとは思いませんでした。YC (A 後半)

- ・しょうゆという目立たないものを題材に時代の流れ、生産という流れなどがわかりふだん触れないことに触れた。TO (B 後)

授業は楽しかったか (前半 30 名, 後半 25 名)

- ・しょうゆの歴史をみていくことで、資本主義的生産の成りたちを考えていくというのがおもしろかった。DT (A 前)
- ・身近なしょうゆを題材にし、資本主義的生産の成立をどう展開していくのか、とても興味をもちました。只のしょう油の歴史かと思いきや意外にも奥が深いので引きつけられ、もっと知りたいと思いました。UR (B 前)
- ・今回の授業も本当におもしろかったです。今回で終わってしまうのが残念です。しょうゆの歴史はとても奥が深く、興味を持ってきくことができました。MS (A 後)

自身にひきつけた感想 (前半 26 名, 後半 18 名)

- ・しょうゆの歴史について考えたことがなかったので初めて知ることが多かった。プリントの絵ではしょうゆ作りは大がかりなものに見えたけど、私のおばあちゃんは昔、家でもしょうゆをつくっていたと聞いたことがあるので、今度きいてみようと思った。KY (A 前)
- ・経済については、自分は不得意と考えていましたが、非常に親しみやすく学ぶことができました。TT (B 前)
- ・しょうゆがなかった時代の生活は考えられない。さしみや、煮物など食べることはなかったのかなと思う。今は生活の中にあってあたり前のものが、ないという時代は想像することができない。NY (A 後)

授業の進め方について (前半 15 名, 後半 10 名)

- ・(要望・批判) 折角、OHP を使っているのにプリントと一緒になのであまり目を向ける事はありませんでした。参考資料程度だと、注目するのでは、と思いました。OHP ではなくパワーポイントでしたら、もっと多彩な説明ができたのではないのでしょうか？UR (B 前)
- ・(要望・批判) 一番最初の質問で(下りしょうゆの話だったと思うのですが・・・) 学生が時間をかけながらも答えようとしていたのに、先生が答えを言ってしまったのでそこが気になりました。MM (A 後)
- ・質問と問いをくり返ししながら説明するというのがどの教科でも求められるのではないかと。HM (B 後)

発展的な感想・質問 (前半 19 名, 後半 8 名)

- ・(質問) 大坂にまさるともおとらない、大豆や小麦の栽培が行われている所はあったのですか。KA (B 前)
- ・(質問) 日本の大豆の自給率はとても低かったと思うのですが、スーパーなどで売っている商品のほとんどに「国産丸大豆使用」と記されているのはなぜなのでしょう？ KY (A 後)
- ・(要望・批判) 「生産」という言葉は1つでも、その流れ(ルート)は様々なやり方があるので、しょうゆの生産の仕方は他の物質の生産の仕方とどうふうがちがうのか気になる？HM (B 後)

その他の感想・質問 (前半 9 名, 後半 1 名)

- ・(質問) 先生的には、現在販売されているしょうゆの中で、どのしょうゆが1番味が良いと思いますか？ IM (A 前)
- ・毎日使っているモノを全く知らないのはよく考えてもおかしいことだなと思う。少し気にしながら身の回りの物を見ると楽しくなるのではないかと思った。FY (B 前)
- ・天ぷらそばは現代の食生活で生み出されたものだと思っていたので、江戸時代からあったと聞いて驚きました。TR (A 後)

事前に予想した以上に、上に提示したような“自身にひきつけた”感想が多く見られた。しょうゆという身近な商品をプランの軸にすえたことが、このような感想を引き出した要因といえるだろう。本プランにおいて採用した身近な商品を軸にすえるこの方法には、社会を認識する筋道を探る上での大きなヒントが隠されていると思われる。

先稿で筆者は、須田勝彦の説¹¹をふまえ、子どもの人間性に触れる教育内容を構成し教材とすることが、教科の学習を“おもしろいもの”にするために不可欠との意見を述べた。「商品にかかわる生産・流通・消費」と定義づけられる経済を、歴史教育の中心にすえるべきとの考えが、本プランの基礎となっている。それゆえ、学生からの“自身にひきつけた感想”は、子どもの人間性に触れる教育内容を理論化するための重要な導きとなる。この理論化を行なうには、1960年代以降の、上原専禄や遠山茂樹らによる歴史教育理論について考察し、検討のための枠組みを設定しなければならないだろう。

おわりに

以上本稿では、授業プラン「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」の提示とともに、実験授業の際に集められた感想文を基礎に実践の評価を試みた。総数174枚もの感想用紙を集めたにもかかわらず、授業のありようを把握しきるには距離があったといえる。しかし一方で、本プランの設問の妥当性と問題配列の順次性に検討の余地があることも明らかとなった。それゆえ、本稿執筆より以後は2つの課題が明確になったといえる。

1つ目の課題は感想の検討から得られた事柄を基礎にプラン改訂への道筋を考察することであり、2つ目の課題は授業の過程の客観化を可能な限り図りうる感想の方法を考察することである。これら2つの課題は決して分離されるものではなく、設問の妥当性と問題配列の順次性を検討する中から、授業の過程の客観化を達成するための方法も導き出されるものとする（これら検討の際には、教育内容の再検討が含まれる場合もある）。これら2課題を克服し授業プランを確定させることは、教育方法学研究室に所属する筆者にとって必須な事柄である。

授業プラン確定後には、実験授業の結果をふまえ、生徒の認識形成にかんする考察を行なう。この考察を経て歴史教育カリキュラムにたいし何らかの提言を行なうことが、筆者の最終的に目ざすところである。

註

- (1) 荒井真一『『しょうゆで考える資本主義的生産の成立』の授業プラン作成へ向けて』（『教授学の探究 第23号』2006 北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編）。本稿で「先稿」と表現する文献は、すべて上記論文を示す。
- (2) 林玲子「経済史研究の主流」（『江戸店の明け暮れ』2003 吉川弘文館） pp.187-8
- (3) 農業生産・商品流通にかかわる実践の到達点にかんしては、前掲(1) pp.181-4 で検討が行なわれている。
- (4) 荒井真一「日本における資本主義的生産の成立をどう教えるか」（『教授学の探究 第21号』2004 北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編） pp.53-4
- (5) 荒居英次「銚子・野田の醤油醸造」（『日本産業史大系・関東地方篇』1959 東京大学出版会） p.104
- (6) 前掲(1) pp.68-70
- (7) 前掲(1) p.193
- (8) 前掲(1) p.195
- (9) 前掲(1) p.197
- (10) 前掲(1) p.196
- (11) 前掲(1) pp.191-2
- (12) 油井宏子「醤油」（『講座・日本技術の社会史 第1巻』1983 日本評論社） p.175

- (13) 本プランの実践は、A・B両大学ともに問題3までを前半、問題4以降を後半とした。それゆえ、すべての問題を同じ基準で比較することには無理がある。しかし、「問題1:9, 問題2:7, 問題3:7, 問題4:6, 問題5:30, 問題6:8」との結果が示すように、問題5についての感想の数は、他の問題に比べ、明らかに多い。
- (14) 須田勝彦「人間の本質規定—教育学の出発点を探るためのメモ」(『教授学の探究 第21号』2004 北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編) p. 85